流山本町・江戸回廊さんぽ①

県内初の小学校・常与寺

NPO法人流山史跡ガイドの会

江戸回廊の風情を残す流山本町。本町通りの中ほどに、鎌倉時代創建という常与寺がある。参道正面に「唐破風」という独特の丸形屋根の玄関と本瓦ぶき大屋根のどっしりとした本堂が、辺りを圧している。境内には、千葉大学教育学部長が除幕した「印旛官員共立学舎跡」の大きな記念碑が建ち、常与寺が千葉大学と流山小学校の発祥地であると伝えている。前側には、樹齢450年という大イチョウが、昔を語りたげに来訪者を見守っている。

水運と白みりんの産地として繁栄していた流山は、明治2年1月、房総地方で初めて設置された葛飾県、後の印旛県の県庁所在地になった。

明治5年8月、新政府は、子ども達が小学校に通う、現在に続く「小学校制度」を開始した。大半の子どもが教育に恵まれていなかったからだ。加村台の印旛県庁に小学校開設命令が届いた。時の県令・河瀬秀治は、9月23日、常与寺の本堂を借り、教員養成所に付属の流山小学校を併設した「印旛官員共立学舎」を開設した。教員志望者は伝習員と呼ばれ、廃止された寺子屋の先生ら約200人が集められた。付属小学校には、近在の男女半々の子どもたち約100人が入学した。授業は、県庁の役人が伝習員を教え、伝習員は、付属小学校で実習を繰り返すという方法であった。伝習員は猛勉強し、明治6年1月28日卒業。この日、県内で最初の小学校教員が誕生し、各々帰村した。

常与寺は、千葉県小学校教育幕開けの「舞台」となり、各地の小学校創立の「源流」となった場所である。

常与寺と印旛官員共立学舎跡の記念碑

その後、教員養成所は千葉町に移り、現在の千葉大学教育学部となった。流山小学校は県内初の小学校として流山本町に残った。

最後に、大正4年制定の流山小学校校歌1番を紹介する。当時の石川重之助校長が作詞した。「江戸川べりのわが里は、その名も清き流山、ここに建てたる学び舎は、われらがための道しるべ」。流山本町の風景そのままに、ゆったりとした格調ある調べで、歌詞が変わることなく代々歌い継がれ102年。全国でもまれな校歌であろう。

流山本町・江戸回廊さんぽ②

流山本町まちなかミュージアム

NPO法人流山史跡ガイドの会

流鉄流山駅の改札口を出て、左側の線路沿いの道を抜けて右斜めにカーブした通称「引き込み線跡道路」を進むと、流山キッコーマン㈱工場の壁面に白みりんの歴史などを写真や絵で展示する「流山本町まちなかミュージアム」がある。平成26年、堀切家の二代目紋次郎が白みりんの開発をして200年に当たる年に作られたものである。

展示には、明治時代の白みりん工場の銅版画があり、工場前には江戸川が流れ、船にみりん樽が積まれ、運び出される様子が分かる。また、みりんを積み出すための専用の万上河岸や昭和時代の工場の写真もあり、流山駅に続く弧状の引き込み線や白みりんを積み込むプラットフォームが見える。写真から、輸送方法が船舶から鉄道、現在のトラックへと変化してきていることが一目瞭然に伺える。

今日でも流山の特産品として知られるみりんの醸造は、江戸時代中期に始められた。当時、みりんは京坂からの上方ものが主流であった。流山のみりんは、苦労に苦労を重ね、透明な濁りのないみりんに仕上げられ、「白みりん」として売り出された。みりんは甘いお酒として江戸の女性に大人気であった。さらに、そばや天ぷら、鰻の蒲焼きなど、江戸料理が庶民に広がるにつれ、江戸料理に欠かせない調味料となっていった。

二代目堀切紋次郎が詠んだ短歌には、「関東の　誉れはこれぞ　一力で　上なき味淋　醸すさがみや」とある。歌の中の「一力」を「万」とし、「上なき」の「上」をとって「万上」と命名したという。

壁面に貴重な写真やポスターなどを展示

同じ時期に、五代目秋元三左衛門も白みりんの開発に成功しており、こちらは「天晴」という銘柄で販売していた。

奇しくも流山本町という場所で「万上」と「天晴」の2大ブランドが生まれ、舟運を利用して江戸に供給されたことで、白みりんを生かした江戸料理のさらなる発展に寄与した。

流山の白みりんは、誕生から200年を経てなお、和食はもちろんのこと、洋食や中華、スイーツなど、料理を支える名脇役として日本人の食を支えている。

流山本町・江戸回廊さんぽ③

浅間神社の富士塚

NPO法人流山史跡ガイドの会

「流山で富士山に登った」というと驚く人がいる。いつでも誰でも登れる「高さ8mの富士山」。それは、流山広小路の浅間神社の富士塚のことである。通りからは見えないが、社殿の裏には見上げるほどの岩山があり、頂上の大きな石碑が威厳をもって鎮座している。

この浅間神社は、江戸時代の正保元年(1644年)の創建で、御祭神は木花開耶姫である。

大昔から噴火を繰り返す富士山への畏怖の念と、美しくも雄大な姿から、富士信仰が生まれた。「あさま」は火山を指す古語であるとの説があるが、その音を充てて「浅間」と書かれるようになったとする説もある。

江戸時代後期には、富士信仰は娯楽とも結びつき、庶民が富士講を結成するほど富士登山が大流行した。流山本町からもこぞって富士山へ登拝したことだろう。しかし、富士山まで行けない人のためにと町内の人達が造ったこの人工の岩山は、富士山遥拝の場所となった。富士塚をつづら折りに一合目から頂上まで登ることで、実物の富士山に登ったのと同じご利益を得たいと願う庶民の心が感じられる。

明治25年(1892年)に完成したこの富士塚は、富士山の溶岩を江戸川で運んで造られた。ジグザクの参道に沿って一合目から九合目までを示す石造物などが建てられ、登り切ったところには富士浅間大神の碑がある。現在では大きな樹木や建物に囲まれているため、頂上よりも九合目付近から、はるか彼方に富士山を望むことができる。

浅間神社裏の富士塚

昭和62年(1987年)に流山市指定有形文化財(建造物)となったが、一年を通して気軽に「登山」できることは今でも変わらない。

浅間神社に参拝して富士塚にも登れば、安産・子育て・火伏せの御神徳に加えて、家内安全などのご利益があると言われている。

浅間神社祭礼は、7月第1土・日曜日。7月1日の富士山の山開きに因んだものだ。豪華な「御神輿」は見もので、この期間だけの「御朱印」も準備されている。

流山本町・江戸回廊さんぽ④

閻魔堂と金子市之丞の墓

NPO法人流山史跡ガイドの会

新しく石畳の観光道路として整備された流山2丁目の「閻魔堂横丁」に閻魔堂がある。堂内には、安永5年(1776年)の銘がある閻魔王坐像(=**写真**)が鎮座している。

閻魔王は、人間の死後35日目に、閻魔帳をもとに生前の罪業を裁く裁判官である。一方では、地蔵菩薩の化身とも言われ、救いの手を差しのべるとされている。

閻魔王の顔は、地獄の裁判官らしく怖い顔が定番だが、流山の閻魔王は「舌だし閻魔」と呼ばれるユーモラスな顔立ちで、罪人にも慈悲を授けるかのようだ。

閻魔堂の真正面には、義賊金子市之丞の墓がある。墓には「轉輪信士位」、「文化十酉年(1813年)十二月」と刻まれている。今でも、線香や花が絶えない。お参りすると、勝負運・金運があがるなどと言われている。

金子市之丞は、地元の醸造業金子屋に生まれ、「金市」と呼ばれた。金市が幼い頃に家運が傾きかけたところに父が亡くなると、次第に博打に手を染め、江戸で盗賊を働くようになった。ただ、金持ちから金品を盗み、貧乏人に配る義賊だったので、人々からは「金市さま」と慕われたようだ。

しかし、捕らえられて南千住の小塚原で処刑された。地元の人々は、彼の義行を偲んで、ふるさと流山の生家に近い閻魔堂に葬ったと言われている。

金市が有名になったのは、幕末から明治にかけ活躍した講釈師の二代目松林伯円が、河内山宗俊、片岡直次郎、金子市之丞、紅一点の遊女三千歳など6人の悪党が絡み合う講談「天保六花撰」を創作したことが大きい。これをもとに河竹黙阿弥が書き下ろした歌舞伎「天衣紛上野初花」が、明治14年(1881年)、東京の新富座で上演され大当たりした。

金市の墓の隣には、三千歳の墓が建っている。地元の言い伝えでは、金市は三千歳と恋仲だった。「離れていては淋しかろう」という粋な人達の計らいで、明治期に建立された墓という。主役6人中、2人ものお墓があるこの閻魔堂は、歌舞伎ファンにもよく知られている。

地域信仰に支えられてきた閻魔堂の木造閻魔王坐像は、平成29年3月に流山市指定有形文化財に指定された。舌を出した珍しい顔の閻魔王が、二人が寄り添うお墓をそっと見守っている。

流山本町・江戸回廊さんぽ⑤

近藤勇・出頭覚悟の地

NPO法人流山史跡ガイドの会

流山の有名な観光スポットのひとつに、「近藤勇陣屋跡」がある。新選組局長・近藤勇が最後に陣営を敷いた場所であり、近藤と副長・土方歳三の離別の地として知られている。石畳の閻魔堂横丁の「閻魔堂」の東隣に、昭和51年（1976年）、流山市観光協会によって本陣跡に石碑が建てられた。並んで立つ説明板には、流山での新選組やその背景が記載されている。

陣屋の跡に建つ石碑

慶応4年（1868年）、新選組は、鳥羽伏見で敗れ、綾瀬の五兵衛新田（現東京都足立区）に駐屯し再起を図っていた。旧暦4月1日、新政府軍が千住宿に迫った報を受け、その夜、一行は江戸川を渡り、未明に流山へ入った。当時大久保大和と名乗っていた近藤を含め、幹部は醸造業永岡三郎兵衛方に最後の本陣を敷き、その他の隊員たちは、光明院、流山寺等の寺院に分宿した。

4月3日、新政府軍の軍監香川敬三は、粕壁付近（現埼玉県春日部市）で流山への武装集団移動の報を聞きつけ、引き返し流山に急進、浅間神社裏を本陣に、永岡屋を囲むように大砲を構えた。その光景を目にした近藤と土方は、激論を交わしたが、近藤は自ら出頭することを決断し、「自分は幕臣・大久保大和である、この隊は「鎮撫隊」であって決して怪しいものではない」と申し開きに赴いた。近藤の身柄は、越谷経由で板橋にある新政府軍の総督府へと連行されたが、途中、近藤勇だと露見してしまう。一方、土方は江戸に戻り、勝海舟に近藤の助命を嘆願したが、功を奏さなかった。結果、近藤は4月25日に板橋で処刑された。

その後、土方は、各地を転戦し、翌明治2年（1869年）、箱館五稜郭で壮烈な戦死を遂げた。近藤、土方ともに享年35であった。

江戸城無血開城間際の切迫した時期、近藤は君恩を思い、新選組の全滅のみならず流山の戦火をも回避し、「武士道」を貫き覚悟の出頭を決断、泰然として散っていった。

近藤の流山入りから、来年で150年を迎えるが、今日も、近藤の「最後の覚悟」と近藤・土方の「永遠の別れ」の舞台をしのび、全国から多くの人が「近藤勇陣屋跡」を訪れる。

流山本町・江戸回廊さんぽ⑥

赤城神社と大しめ縄

NPO法人流山史跡ガイドの会

「流山本町まちなかミュージアム」に沿った道路を南に約400メートル行くと一茶双樹記念館に着く。ここから左手を望むと、うっそうとした木々に覆われている小高い山が見える。山頂には、赤城神社が鎮座する。お椀を伏せたような小さな山は、麓からの高さが約10メートル、周囲が約350メートルで、「赤城山」と呼ばれる。

この小山は、流山の地名発祥の地とも言われ、伝説によると、鎌倉時代に上州（現在の群馬県）赤城山の一角が崩れ、洪水によってこの地に流れ着いたので「流山」というのだと言われている。また、上州赤城神社のお札が流れ着いたのをお祀りしたのが流山の赤城神社の始まりという説もある。

神社の創建は不詳だが、現在の本殿は寛政元年（1789年）の再建とされており、彫刻の龍など実に見事である。

平成26年に調査が行われ、神社本殿の奥から200年以上の時を経て、「棟札」や「木札」が発見された。その後「赤城神社本殿附棟札・木札及び橋掛り」として、平成27年3月、市の有形文化財に指定された。

また、社殿を取り巻く林を社叢といい、およそ350本の古木や大木の繁る赤城山の社叢林は、平成28年9月に市指定記念物（天然記念物）となった。

この神社で有名なのは、昭和54年1月、市の無形民俗文化財に指定された「大しめ縄行事」で、毎年10月第3土・日曜日の「例大祭」に先立つ、第2日曜日の「宮薙の日」に行われる。稲藁は、市内の特約農家から刈り取ってもらっている。

しめ縄の作り方は、4分割した青竹を芯にして稲藁を巻き、さらに荒縄で巻き上げ形を整える。これを3本の太縄で撚り合わせて、1本の大しめ縄ができあがる。しめ縄の重さは約500キログラム、長さ約7メートルあるといわれ、翌年まで掲げられる。できあがった大しめ縄を参道入口にある保存塔に取り付けて1日の作業が終わる。

1年間地域を見守る大しめ縄

この一連の作業は、氏子と自治会の皆さんが集まって作る必見の伝統行事である。

そして、翌週の例大祭では、神輿が本殿に向う38段の急な階段を一気に駆け登る。勇壮なクライマックスを一目見ようと、多くの人が訪れている。

流山本町・江戸回廊さんぽ⑦

一茶双樹記念館と杜のアトリエ黎明

NPO法人流山史跡ガイドの会

流山本町まちなかミュージアムから400メートルほど南へ歩くと、左手に一茶双樹記念館が見えてくる。

黒板塀の記念館の正面玄関を入ると、みりん醸造で栄えた商家、秋元本家の明治頃をイメージした店先が再現されている。その展示を通り抜けた奥は、枯山水の庭園と安政年間（19世紀中頃）建築の数寄屋造りの建物が江戸情緒を醸し出している。床の間には、明治の皇族小松宮彰仁親王が御来訪の折に揮毫され、のちにみりんのラベルとなった「天晴」の掛軸が掛けられている。

小林一茶は、14歳で北国街道柏原宿（長野県信濃町）から江戸に出てきて以来、苦労を重ねていたが、馬橋の油商大川立砂の応援もあり、葛飾派の二六庵竹阿のもとに入門、次第に下総周辺に頻繁に通うようになった。そんな中、一茶を弟のようにかわいがり、物心両面で支えたのは五代目秋元三左衛門である。俳号を双樹と号した一流の文化人で、白みりん醸造に成功し、流山のみりんの名を世に広めた実業家であった。

一茶は、流山を「第二のふるさと」としてたびたび訪れ、たくさんの句を作っている。そんな小林一茶と秋元双樹の交友を記念して、平成2年に「小林一茶寄寓の地」として市指定記念物に指定。新座敷と呼ばれていた建物を解体・復元、一茶庵など付属の施設を整備し、「一茶双樹記念館」と命名して平成7年4月に開館した。主庭は、アカマツを中心に枯山水が配置され、庭の入口には、一茶の「夕月や流残りのきりぎりす」の句碑が立っている。

現在では、文化施設として親しまれ、建物や庭園を観覧できるほか、お抹茶を楽しむ会や句会などの催しも毎月開催されている。

数寄屋造りの建物と枯山水が美しい
一茶双樹記念館

また、一茶双樹記念館の斜め前には杜のアトリエ黎明がある。ここは洋画家の笹岡了一と画家で歌人でもあった秋元松子夫妻が建てたアトリエで、後進の指導にあたった絵画研究所を遺族が市に寄贈した。

絵画や工芸などの作品展が開催されるほか、ガーデニング講座や水彩画教室なども開かれている。テラスで四季移ろう庭を眺めながら、お茶を楽しむこともできる。紅葉の時期の庭園は一段と美しい。

流山本町・江戸回廊さんぽ⑧

新選組ゆかりの寺院

NPO法人流山史跡ガイドの会

幕末の慶応4年（1868年）4月2日未明から、近藤勇に率いられた新選組二百数十人が江戸川の「丹後の渡し」を渡り、流山本町に入ってきた。その渡しは、今も江戸川の流れに橋台のみが残る、旧流山橋の辺りにあった。

丹後の渡し周辺にある寺院は、隊士の宿舎として利用されたと言われている。新選組ゆかりの寺院を訪ねてみる。

寶泉山広済院長流寺

一茶双樹記念館に隣接。梅並木の長い参道、本町一の大イチョウと松の大木のある浄土宗の寺院で慶長12年（1607年）の創建と言う。

毎年4月第2日曜には「近藤勇忌」があり、全国から新選組関係者や愛好家が集い、厳かに法要が営まれている。境内には恵比須様があり、ながれやま七福神のひとつになっている。慶長12年造立の「笠つき馬頭観音」も見られる。

赤城山光明院神楽寺

光明院は赤城神社の別当寺と言われる。創建は江戸時代初期とされる真言宗の寺院で、本堂正面には「新撰組隊士分宿の寺」の看板がある。境内には流山の繁栄を語る石碑や墓が多く残っている。参道左手に小林一茶と五代目秋元三左衛門（俳号双樹）の連句碑があり、歌は当時の原風景を彷彿とさせる。参道右手には、万上みりんの堀切紋次郎、天晴みりんの秋元三左衛門、分家の秋元洒汀の墓などがある。洒汀は、明治、大正時代に醸造家として財を成す一方、文学・俳句・美術に造詣深く、流山の文化発展に貢献した。

また、本堂前には、市指定記念物の「タラヨウ」の大木が存在感を放っている。別名「葉書の木」とも呼ばれ、葉の裏に字が書けることから「葉書」の語源となったと言われている。

光明院本堂前にあるタラヨウ（左）

洞雲山流山寺

光明院から100メートルほど南に進むと左手に見える、江戸時代初期創建の曹洞宗の寺院。

境内には、天保五年（1834年）銘の大型で貫禄ある大黒様が鎮座する。こちらもながれやま七福神のひとつ。

一茶の恩人で馬橋の俳人、大川立砂の子で、兄弟弟子ともいうべき大川斗囿の句碑も。碑の上部には太平洋戦争中に被弾した跡が残り、爆撃の激しさを物語っている。

流山本町・江戸回廊さんぽ⑨

国登録有形文化財めぐり

NPO法人流山史跡ガイドの会

「国登録有形文化財」の制度は、主に近代の歴史的建造物の保存と活用を目的に制定された。市内には国登録有形文化財が5件あり、そのうちの4件が流山本町にある。流山市の誇る国登録の歴史的建造物を訪ねてみる。

呉服新川屋店舗

流山における国登録有形文化財の第1号。創業は弘化3年（1846年）で、広小路の中心に立地し、流山本町を代表する呉服店の建造物。土蔵造店舗兼住居の見世蔵は、明治23年（1890年）建築で、分厚い重厚感あふれる黒壁が特徴。南北の大きな鬼瓦には、商家らしく恵比寿様と大黒様が鎮座しており、店の繁栄と流山本町の歴史を見守り続けている。

笹屋土蔵

新川屋と向かい合わせにある笹屋商店は、日本橋越後屋（三越の前身）の仕立て屋「笹屋」の暖簾分けで、万延元年（1860年）の創業。土蔵は、明治31年（1898年）に呉服店「三河屋」の土蔵を移築したものである。三河屋の土蔵はこの他に3棟移築され現存している。現在は「蔵のカフェ+ギャラリー灯環」として人気を博している。

寺田園旧店舗

笹屋から南へ徒歩4分。明治22年（1889年）建築の寺田園旧店舗は、黒漆喰磨き仕上げの本格的蔵造り店舗である。寺田園は流山村の草分けといわれる六軒百姓の一つで、お茶・乾物類を扱い、現在も流山2丁目で営業している。旧店舗は見世蔵（＝**写真**）として整備され、世界的万華鏡作家・中里保子さんの作品などが展示されるギャラリーとして大好評。往年の茶甕も見ることができる。

清水屋本店店舗兼主屋

寺田園旧店舗の前側にある、伝統の絶妙な餡作りで有名な人気の老舗高級和菓子屋。明治中期の建築で、切妻造二階建の店舗兼住居である。店内の洋風の洒落た大理石塗り円柱が目立つ。昭和8年ごろ店舗土間を切り下げており、江戸川土手を兼ねていた旧本町通り引き下げの歴史的証人とも言える。店内に展示されているさまざまな打ち菓子の木型は、店の歴史を物語っている。

流山本町・江戸回廊さんぽ⑩

町民鉄道・流鉄流山線

NPO法人流山史跡ガイドの会

流鉄流山線は、流山駅と馬橋駅を結ぶ全長5・7㎞の鉄道で、県内では2番目、全国でも十指に入る短い鉄道だ。今年3月14日で、開業102年を迎える。

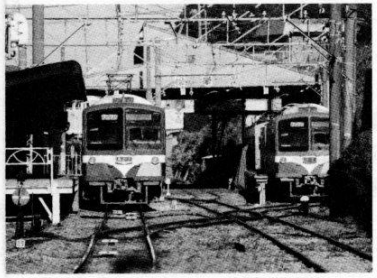
江戸時代から水運とみりん醸造で栄えていた流山町であったが、交通が水運から鉄道に移りつつあった時代、流山町にも鉄道を通そうとする機運が高まった。大正2年（1913年）、町の有志ら32人が発起人となって「流山軽便鉄道株式会社」を設立し、大正5年（1916年）3月に開業した。発起人のほとんどが流山町民であったことから「町民鉄道」と呼ばれた。当時の駅は流山駅、鰭ヶ崎駅、大谷口駅、馬橋駅の4駅。客車には電灯など無かったから、夜の乗客は提灯を片手に乗車したなど、時代を感じる数々のエピソードも残されている。

開業当初は、軌間が762㎜の軽便鉄道であったが、大正13年に軌間が1067㎜に拡幅され、常磐線との貨物直通運転が始まった。大正14年（1925年）、陸軍糧秣本廠流山秣倉庫（のちに流山出張所。現在の流山9丁目付近）が設置されることになる。流山の糧秣廠は、軍馬の飼料を加工する施設で、江戸川や利根川流域は馬の飼料となる草（秣）や藁の生産地が近い上、川と鉄道の両方を使える立地のため流山町が選ばれた。

赤城駅（現在の平和台駅）からは糧秣本廠と帝国酒精株式会社（現在のメルシャン株式会社）の工場まで、流山駅からは野田醤油株式会社流山工場（現在の流山キッコーマン株式会社）へも引き込み線が敷設されている。

流山駅は流山本町の玄関口であり、駅舎は改修などがされているが、創業時の姿を今に伝えている。ローカル色豊かな駅として関東の駅百選にも選定された。

開業から1世紀、引き込み線は無くなり社名も幾度か変わったが、西武鉄道から購入した車両が市民の足として活躍し続けている。そして公募により命名された愛称の「なの花」「流星」「若葉」「あかぎ」の車両が編成ごとに色分けされて、閑静な住宅街を軽快に走っている。また、今では珍しくなった厚紙の切符「硬券」を現在も販売している。夏のビア電車など車両を利用したイベントや写真展も開催されて、市民や多くの鉄道ファンに大好評である。



流山駅に並ぶカラフルな車両

流山本町・江戸回廊さんぽ ⑪

房総地方最初の県庁所在地

NPO法人流山史跡ガイドの会

明治初期、木村を除く現流山市域の村々は「葛飾県」やそれに続く「印旛県」に属し、両県の県庁所在地が現在の加に置かれていた。現在の中央図書館・博物館の敷地にある「葛飾県印旛県史跡」の碑（＝**写真**）は、ここに県庁があったことを記念して建てられた。

新政府は、下総国に「葛飾県」を置き、現静岡県藤枝市にあった田中藩が加村台に設けた「本多家加村台御屋敷」（通称田中藩陣屋）を県役所（現県庁）に決定した。当時、空き家となっていた御殿と54軒の長屋は、県役所に絶好の施設であった。

149年前の明治2年（1869年）1月13日、流山の加村は、房総地方の最初の県庁所在地となった。

流山に県庁が置かれた理由は、江戸・利根川の舟運の利があったこと、加村台屋敷の大きさが県庁に適当であったことに加え、みりんなどの醸造業で栄えた有力商人の存在があったことである。

なお、安房・上総には、1カ月遅れで宮谷県が設置された。葛飾県は、下総国の大名領を除く7郡と武蔵国葛飾郡北部におよび、総石高28万石、県民約23万人であった。

明治4年（1871年）に廃藩置県が断行され、続く府県統合により、下総国では葛飾県を母体に旧藩の6県を併せて「印旛県」が成立した。印旛県の県庁や裁判所は、引き続き旧葛飾県庁の加村に置かれた。総石高は約46万石、県民約46万人に達した。

初代県令には河瀬秀治が任命された。河瀬は明治5年（1872年）、いち早く「印旛官員共立学舎」を立ち上げ、千葉県近代教育をリードした。その伝統は、現在の流山小学校に引き継がれている。

また、同年に印旛裁判所が設置され、現在の市役所付近に置かれた。裁判所もまた県庁と同じく、千葉県下で初めて流山に置かれた。

明治6年（1873年）6月15日、印旛県と木更津県が合併して千葉県が誕生し、県庁や裁判所、印旛官員共立学舎は千葉町（現千葉市中央区）に移った。県庁が置かれたことは、流山の当時の繁栄を示しており、博物館では当時を物語る資料が見られる。

流山本町・江戸回廊さんぽ ⑫

最終回

加村河岸と大杉神社

NPO法人流山史跡ガイドの会

江戸川の堤上は、四季折々の顔がある。春の菜の花、夏の花火大会、秋のススキ、冬の眺望など、散策の人々を楽しませてくれる。

ここに立てば、北に筑波を望み、南に赤城の杜と流山橋のかなたには富士山が、東には流山本町の街並みを眼下に、市役所や図書館・博物館のある台地までを見渡せる。

堤上には、「矢河原の渡し跡」の標柱がある。かつて、この辺りは対岸への渡し場であった。大名領の御用河岸でもあり、下総・常陸・奥州の荷物を江戸に運んだ「加村河岸」があったとされる。

江戸川の加村河岸から利根川の布施河岸までは「諏訪道」と呼ばれた。諏訪道は、駒木の諏訪神社と布施の東海寺（布施弁天）へ参詣する信仰の道であり、米穀や魚介類を運ぶ陸送の道でもあった。こうした諏訪道と、江戸川の水運の結節点として繁栄することとなり、川べりに細長く流山本町が誕生した。

また、この辺りはかつて「加村岸」と呼ばれ、築約80年の建物を改装したあかり館の壁面には、今も「加村岸1324」の旧町名板が貼ってあり往時をしのばせる。

加村岸の鎮守様として祀られたのが大杉神社（＝**写真**）である。記念碑には、天保年間創建とある。祭神は倭大物主甕玉大神で、総本宮は、茨城県稲敷市にあるあんばさま総本宮大杉神社。古くから水運の神、疫病除けの神、商売繁盛の神として信仰されていたので加村岸の鎮守としたと伝わる。

社紋は葉団扇で、総本宮と同じく天狗信仰によるもの。6月下旬の土・日曜日に行われる大杉神社の祭礼には見事な御神輿が繰り出され、流山広小路界隈は大いにぎわう。

春になれば、流山本町江戸回廊を舞台に、見て食べて楽しい華やかな祭りの季節が始まる。昨年の4月から、合計12回にわたって、流山本町・江戸回廊のさまざまな場所を取り上げてきた。このエリアには、今まで紹介してきた以外にも魅力ある場所が多数存在している。江戸・明治・大正・昭和と連綿と続く歴史と伝統文化の魅力あふれる流山本町にぜひ、訪れてみてはいかがだろうか。